

修学旅行2日目。美ら海水族館を見学した後は二手に分かれての体験学習だった。ぼくはカヌー体験組に同行し東村の慶佐次川へ。暑いぐらいの天気でみんなカヌーが気持ちよさそう。ヤエヤマヒルギやオヒルギを間近で観察した。ガイドさんの解説で、「マングローブは植物の名前ではなくて、陸と海の境界に生えている植物の“総称”である」とか、「ヒルギは海水から吸い込んだ塩分を葉っぱから吐き出す。だから葉っぱがしょっぱい。なめてみな！」とかレクチャーを受ける。やはり実物を見るのは大事だ。マングローブなんてなかなか見れないからみんな楽しそう。

さらに先に進むとオオハマボウが生えていた。オオハマボウはヒルギの仲間よりも陸側に生えているアオイ科の植物で、「バックマングローブ」とも呼ばれている。陸側とはいえ多少なりとも海水の塩分の影響を受ける場所なので、普通の陸上植物にとっては住みにくい環境だが、オオハマボウはそこに適応している。マングローブ林と一口に言っても、じつに多様な生き物たちがそれぞれの戦略でせめぎ合っているのだ。

ガイドさんがオオハマボウの木のところまで立ち止まり、「さて…」と改まりながらニヤリとする。そして、「これを見よ！」と、いじわるに言いながら葉っぱを指差した。オオハマボウの葉の裏に、大量のカメムシが群れている！シロジュウジホシカメムシだ！ガイドさんは、この大量のカメムシを高校生が見てきゃーきゃー怖がると思って、その反応を楽しもうとしていたのだろう（いわゆるガイドの“鉄板ネタ”）。ただ、うちの生徒はそうはいかない。ソウシたちは「うおおーすげー！」と、逃げるどころか、むしろ顔面スレスレまでカメムシを近づけて大興奮だった。これにはガイドさんも「な、なんなんだきみたちは?!」と愕然としていた。そのやりとりが面白くてつい笑ってしまった。これぞ都科技クオリティ。ただし、もちろん全員がそうだったわけではなく、ユキノは「1匹ならきれいだけど、群れてるのは…きもーっ!!」とのこと。生徒も多様だ。

沖縄修学旅行中、あまりに暖かいし、時間の流れもなんだかのんびりしていて、生徒とともに「沖縄に住みてえ〜」なんて口々に言っていた。「移住して、こういう自然ガイドになるのも良いなあ」なんてつぶやいたら、ユウガに「龍平先生はアツク語りすぎて全然前に進まなそう」と言われてしまった。確かに…カメムシとかを見つけたらお客さんそっちのけで興奮してずっと立ち止まってしまうそう。



葉の裏に群れる なるべく写真を小さくしたが、虫嫌いにとっては最悪な図だろう。



カメムシに興味する普通じゃない(?)生徒たち もちろん嫌がる人もいたが、うちの生徒の場合、喜ぶ派の方が多そう。



シロジュウジホシカメムシ（赤頭型） 慶佐次川 1月15日
背中に白の十字模様が入る、赤・白・黒のコントラストが美しいカメムシ。腹面が白と赤のシマシマなのも面白い。本州にはいない。沖縄や奄美大島などでは頭が赤いが、西表島などの南西諸島南部では頭が黒い。マングローブ林の内陸側に生えるオオハマボウの木に集まり汁を吸う。



カヌーでマングローブ林を進む さすがに水は冷たかったが、気温が高くて日差しも強く、カヌーが気持ちよさそう。



支柱根が発達したヤエヤマヒルギ マングローブの仲間は根を発達させて波で倒れないようにしている。この複雑な根が魚などのすみかになっている。



ガイドウォーク マングローブ周辺の生き物についてガイドさんに解説してもらおう。